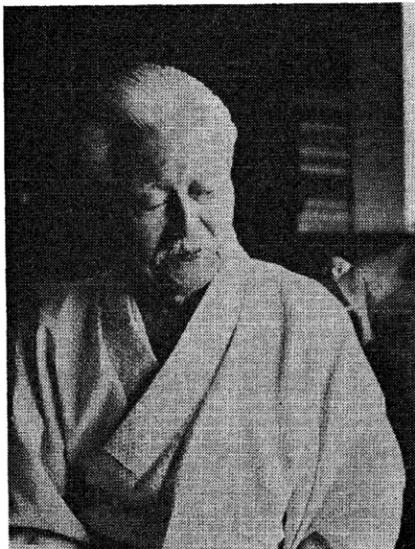


---

**会 記 Proceedings of the Society**

---

**紙 碑**

追悼 中西悟堂氏

「野鳥と共に」(昭和10年刊, 巢林書房), この書にはヨシゴイが著者中西さんの書齋でネコと暮し, 他の鳥も肩に止ったりしている写真があった。仔飼いにせよヨシゴイには驚いた。幼い頃から苦勞され, 滝に打たれ, 山に臥す荒行で知られ, 唯一の慰みが鳥の訪れであり, 小鳥が肩に止ったりしたという。鳥や獣は人の目を見る。中西さんの目はきっと友を求める親しみに充ちていたのだろう。その目がヨシゴイをあれほど懐かせ, またどんな鳥も中西さんを友として暮したのである。山中の苦行でさすがのように鳥を求めた中西さんは鳥を忘れられず, ついに家に野の鳥を呼込んでしまった。しかし, 余裕ができてみると, 書齋で安楽に生きる彼らの目に野生を忘れ子孫を増やす使命を果せない憐れさを感じとって, はたと我が自我の非に覚められたに違いない。それは, 野の鳥は野にの悟りであった(「野鳥と共に」p. 174 参照)。「野鳥」という呼び名は, この時彼らに与えられた心の底から生れたものであったろう。その後の中西さんの生き甲斐は, 「野鳥」であるべき彼らの籠からの解放に捧げられた。

そこに, 飼鳥問題のみならず, 霞網, 空気銃の問題への闘志に充ちたエネルギーの源があった。それは, かつての荒行や放飼いを通じての悟りに裏づけられ, 一步も譲れないかたくなさともなり, 獺友会などの論争も根強いものとなった。そして, 鳥類保護連盟会長として起られた山階芳麿博士と並び, 保護の指導の双壁として不屈の闘志で事に当られた。

昭和9年, 中西さんの悟りによりできた日本野鳥の会には, 当時の日本鳥学会の学者や詩人も賛同し, 次第に若い会員が増え, 中西会長の勞を惜まぬ山野の指導がはじまり, 初期に名づけられた「探鳥会」の名で普及し, 後継の指導者も多く育った。しかし, 山中で昔をしのんで小鳥を集め, 鳴声を

擬しての探鳥指導は山梨の中村幸雄氏を除けば比類なく、全国の山を踏破し、転落負傷しても止まず、鳥の観察や山の詩、随筆の文様と数は内田清之助博士のそれと対比されて夥しく、逝かれた時も「定本野鳥記」が続いていた。

若世代の会員の増加に伴い、研究部も初期にすでにつくられたが、自身も水に没し、木に攀じ、森に潜んでの生態観察や生態写真も数多く出された。しかし時代は移り、自由な趣味の会を脱して、資金を集め、保護を事業として推進する実働の財団法人化の波に押されて、名誉会長として第一線を引かれ、弱視の進むも意とせず、生涯の書「野鳥記」半ばで終られた。行年 89 才、昭和 59 年 12 月 8 日、法名悟堂のままであった。

その時、中西野鳥の会は事実上脱皮した。しかし、その基盤あってこそ、山下静一第二代会長のもと、活力に充ちた現在の野鳥の会のあることは、歴史として消えることはない。

終りに、日本鳥学会にも昭和 22-50 年の長きにわたり評議員を勤められたことを感謝し、ご冥福を祈りつつ、この一文をご遺族に捧げる。  
(黒田長久)

### 中西さんをおくる

夏ごろ、中西さんの健康状態がよくないらしいという噂を耳にした。9 月には、もうこの冬は越せないのではないかという話も聞いた。しかし、そのようなことを仄聞することは以前にもあったし、これといった根拠はないものの、また元気に机に向かわれる日が来るものと信じていた。8 月に頂いた葉書も、「年のわりには小生、どうやら何とかやっております」という文で終わっていたので、安心したい気持ちもあった。10 月に高野伸二さんの計報を電話であちこちに知らせている時、中西さんも入院していると聞き、あわててご自宅に電話したところ、すでに退院されていて、元気なお声を聞くことができた。秋口に体が不調だったので、検査のために入院したこと、あらゆる検査をされてかえって疲れてしまったこと、CT スキャンで輪切りにされたこと、腎臓が弱っていると指摘されたことなど、いつものとおり次第に滑らかなになる口調で語られた。ちょうどその日の朝、退院して初めて庭に出たこと、「定本野鳥記」(春秋社)や「アニメ」(平凡社)の仕事にも直きに手を付けるなどとも。結局、この葉書と電話が中西さんに接する最後のものとなってしまった。

以前から著書を読み、軽井沢の探鳥会で指導していただいていた私ではあるが、深く中西さんと係りあったのは、昭和 44 年に日本甲種猟友会が国会議員多数の署名を集めてカスミ網の使用を認めさせようとした事件があったからである。カスミ網による密猟は、禁止後 20 年以上も過ぎた当時、なおも陰に陽に続いていた。そして、折に触れ、このような形で噴出するのだった。この事件が契機となって、私は翌年の初夏から 53 年春まで、日本野鳥の会事務局に勤めた。私淑していたものが、使われる身になった訳である。それまでに、中西さんの気難しさについては、いろいろと話を聞かされていた。中西さんの許で働くなどやめた方がよいと忠告して下さる人も何人かいた。しかし、カスミ網の件で中西さんとの係りを持っていた経験から、確かにいわゆる難しい人ではあるが決して意思の疎通を図ることができない人とは思えなかった。1 年ほどたってからではあるが、私の意見を入れて、それまで旧かなづかいで書かれていた「野鳥」の原稿を現代かなづかいを使って書かれるようになったことでも、このことは知られよう。それに共通の認識があった。今、野鳥の会が力を持たなければ、日本の自然は近い将来悲惨なものになるであろうこと、また従来他の組織および会の中心にいる方々の力は余りに限定されていること。実際、自然の保護や公害問題に関する問題意識の強さには、中西さんとほかの方々の間には大きな距りがあると私は感じた。人は、ワンマンであると中西さんを非難したが、このことについては、むしろ中西さんの方が深い孤独感を持ち続けていたのではなかろうか。

昭和 45 年 11 月に、野鳥の会は財団法人となった。このころの中西さんには心労が絶えなかった

ようだ。お会いする度に顔色が悪くなっていた。終いには手の甲や腕のあちこちこちに内出血をおこして紫色の斑点が出るまでになった。法人設立に必要な募金は予定どおり集るのか、時期尚早とする反対意見をどうさばくか、有給の職員をかかえてうまく運営できるのか、など難問が重なっていた。それに法律上の手続きが難航していた。早く設立したいとする希望が過大に伝わって、当時農林政務次官だった渡辺美智雄衆議院議員が、いかにも威勢よく林野庁の担当者に早くしろとせかしてくれたのである。当の担当者は通例どおりの手続きを踏んでいたのに、かえってへそを曲げ、難題を持ち出してきて、私はこれらの問題には楽観的であったが、中西さんの健康には悲観していた。法人設立後の最初の仕事は、中西さんの葬儀ではないかと真剣に考えざるを得なかった。葬儀委員長はどなたに引き受けていただくかなどと秘かに心の準備もしていたのである。

長い間日本野鳥の会の会長席にあった中西さんと、さまざまな理由で袂を分かち破目になった人は多い。鳥の世界の第一線で活躍している方々では、むしろそのような人の方が多いかも知れない。確かに、実行力に富む者よりも時に讒言する者の言を忠誠心の表われとする傾向があった。そんな背景があったので、54年秋から中西さんと一部の理事および事務局との対立が起きた時に、中西さんをあくまで支持する人は少数派であったようだ。そして、いったん会長を辞したあとで名誉会長に就任し、これら少数の人々から受けていた信望さえ傷つけてしまわれたように思われる。52年秋、中西さんは文化功労者の列に並べられたが、当時事務局にいた私は何度かひやりとさせられた。中西さんに文化勲章をという働きかけに、一部の理事から全く意外な反応が起こったのである。そんな運動はけしからぬ、また中西さんにはそんな資格はないという人まで出た。この時の運動には、私は書類を整える程度のことしか参加しなかったが、中西さんには十二分な資格があること、そのことは十分に理解を得られるだろうことには確信を持っていた。実現には周囲の人たちの運動が必要なことも。そして榮譽に伴う国からの年金が欲しかった。会としては当然中西さんの老後のことも考えねばならなかった。それによって会の責任を免れるわけではないにせよ、中西さんに年々無税の年金が入ることになれば、会の負担はかなり小さくなると考えた。中西さんは激怒する。会の理事からそんな意見が出るとは思ってもよらなかったであろう。そういう人たちも出てくるであろう祝賀パーティなぞ聞くなと。私としては、君たちのお祝いの言葉を受けるほど嬉しいことはないよ、ぐらいいおっしゃって欲しい気持ちだった。パーティは帝国ホテルでにぎやかに行われたが、この時の亀裂は後々に跡を引く。

こうしたことがあって、中西さんの晩年は心愉しからぬものがあったようだ。腰を痛めて歩行が困難になったうえ、白内障で視力を弱めたこともお気の毒だった。山野を歩き回り、緑を鳥かげを楽しむことができなくなれたのだ。こうしたことができたなら、もっと晴れやかな日々を持たれたであろうに。考えてみると、私はこのようなお体の状態に対し、ほとんどお慰めしなかった。そういう言葉を持つ方々は大勢いらっしゃるようだったので、体が弱ってから初めて病身の人の気持ちが分かるようになったよ、と口にされたことがあった。私が健康のためにジョギングを始めた時も、我がことのように喜んで下さった。そして、私が喉を痛めやすいと気づかれてからは、私の前では決して煙草を口にされなかった。気がつかないうちに暖かい多くのお心遣いをもっと受けていたに違いない。棺の中の中西さんは血色も良く、狭い棺が不満だといわんばかりに肩を張っていた。肝臓がんということだったが、とてもそうは見えなかった。つまり一過性の病気であって、持ちこたえればまだまだ長寿が続けられたのと思った。感謝の念よりも、残念という気持ちの方がよるかに強かった。

(竹下信雄)

中西悟堂氏の略歴、主要著書については「アニマ」1985年3月号および「野鳥」1985年3月号を参照されたい。